2020 年 7 月

今月の新着図書から

エマニュエル・レヴィナス『全体性と無限』，藤岡俊博訳（講談社学術文庫，2020 年）

高等科図書主任
林　知宏

エマニュエル・レヴィナス（1906-1995）は，20 世紀を代表するユダヤ系哲学者とされる．今回自粛期間中に新訳として彼の主著が刊行されたとき，なぜか胸がときめいた．すでに熊野純彦訳（岩波文庫）も手にしていたが，読了するまでに至らず，いわゆる「積ん読」状態だった著作をじっくりと読む時間が与えられたと感じたからだ．もとはレヴィナスの博士論文として執筆され，学位を授与されてから（1961 年，私が生まれた年だ）およそ 60 年を迎えて，研究が新たな水準に達したことも示している．

レヴィナスについては，井筒俊彦が『意味の深みへ』の中で，ジャック・デリダによるレヴィナスへの評として紹介していた言葉が気になっていた．「我々はユダヤ人なのか．我々はギリシャ人なのか．「ユダヤ人」と「ギリシャ人」とのあいだの相異のうちに，我々は生きている．」井筒やデリダの文脈とは離れるが，私にとってギリシャ的とはやはり数学，あるいは数学的論証である．カントルに代表される無限集合論は，無限を了解する一つの道筋を提供してくれた．濃度，超限順序数という概念をもとに無限の持つ奥深さ，すなわち無限の「無限階層構造」を明らかにしたのだった．少なくともこの著作の中でレヴィナスが展開する議論は，カントル同様に難解であることは変わりないが，およそ異なる様相を呈している．徹底して数学的理性に訴えるのと異なる方法をとるのだ．

レヴィナスは，「私」，「同」，「他」を鍵概念とする．そして例えば，「無限の概念は他に対する同の分離を前提としている」（81 頁）であるとか，「他が同と関わりながらも同との関わりにおいて外部にあるという他の外部性は，ただ無限の観念によってのみ維持される」（346 頁）と語る．ここには近世の，例えばデカルトが「省察」において，人間と神の対比によって有限と無限への認識の道を示したのとも異なる，人間の存在する世界における相互関係の地平で無限が論じられていく．無限が存する他の外部性として，人の「顔」にもこだわる．そこがまさに「ユダヤ的」なのだろうか．不思議で新鮮な視点である．

レヴィナスの書は，難解さの中に「欲望は，充たされない欲求とは一致せず，充足や不充足の彼方に場を占める．他人との関係あるいは，無限の観念が，欲望を成就する」（318 頁）というような知的スリルに満ちた言説がちりばめられている．翻訳者である藤岡俊博の『レヴィナスと「場所」の倫理』（東京大学出版会，2014 年）も研究書として推薦できる．私には，自宅で一日引きこもって読書していた時期の大いなる収穫の一つだった．